

# みなとMIO MACH ケンチクさんぽ vol.16 兵庫地域会 地域まちづくり委員会

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部  
兵庫地域会 地域まちづくり委員会

## 商店街の中の小さな映画館

この夏の終わりに、元町商店街にある元町映画館で映画を観てきました。戦中最後の沖繩県知事として知られ、神戸市出身、私の母校OBでもある島田叡の生涯を描いた作品が上映されていたからです。これまでも興味のある映画が上映されていたのですが、見逃してばかりで、これがこの映画館の初めての利用でした。

チケットを購入してから、商店街で昼食を済ませ、上映時間が近づいた頃に戻ると、入り口前には結構な人だかりが出来ていました。通りにあふれ出したリーフレットの棚やポスターを張った立て看板をすり抜けるようにしてエントランスに入りました。そこは、シネコンを利用することが多い私にとって、映画館と呼ぶにはあまりに小さな空間でした。トイレブスの扉がエントランスに面しているなんて、この先の客席は一体どんな空間になっているのか？車いす用座席を含めて67席のホールは、荒く塗られたペンキのムラが見えるほどの天井高さ、スクリーンの前にはなぜか舞台があって、まるで小さな芝居小屋に入ったようです。壁は吸音材をガラスクロスで覆ったものを天井と同様の黒いペンキで塗って仕上げとしたもの。果たしてこのつくりで、音響は大丈夫なのか？好奇心は増すばかりです。やがて座席が全て埋まり、

照明が消され、真っ暗になるとスクリーンだけが浮かび上がり、さっきまでじろじろ眺めていた壁や天井は見えなくなり、音響なども全く気にならず、気が付くとすっかり映画の中に入り込んでいました。客席のお互いは暗くて見えないけれど、同じように固唾をのんだり感動したりしている気配が伝わってくるような気がして、コンパクトな空間の中で映画鑑賞の体験を共有している感じが心地よく思えました。エンドロールを見ながら、映画の余韻にふけりつつ、映画館の雰囲気を楽しんでいました。ホールを出て、エントランス近くに置いてあった可愛い装丁の「元町映画館ものがたり」という本を購入し、映画館を後にしました。

この本は2010年8月に開館した元町映画館の約10年の軌跡を記録し、開館10周年の節目に発行されました。

勤務医だった堀忠氏が映画館をつくらうと思いつき、元町商店街の中で廃墟化していた小さなパチンコ屋の2階建てビルを取得、それから資金と建物の設計者を含めた仲間を集め、工事完了を経てオープンに至るまで、この本の中でそれらの経緯が描かれています。建物に関しては、リノベーションの制限の中で、映画館という用途に対するさまざまな法規制をクリアすべく苦心した様子が伺えます。またお金が不足していたことから、仕上げのペンキ

塗りや棚づくり等をスタッフのDIYで行ったうえに、廃館した映画館から椅子を譲り受けたり、中古で映写機を揃えたりと、開館まで本当に大変な道のりだったことが分かります。

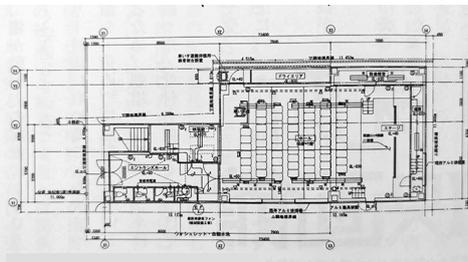
映画館が出来るまでの過程を知り、入館した時に抱いた好奇心のような違和感の理由が分かりました。小さな映画館には不釣り合いな舞台は、法規制に適合させるために出来たようです。ただ、その舞台は、結果として今や日本一イベントが多いと言われるようになったこの映画館を特徴づける存在になっているようで、「ドライブ・マイ・カー」の濱口竜介監督をはじめ多くの映画監督や俳優がここで舞台挨拶をされていることも知りました。

また、訪れた際はコロナ感染症対策として閉鎖されていましたが、開館から数年後にテナント契約が切れた2階部分が、ロビー、イベントルームとして利用されているようです。いわば余白のスペースがイベントの出来る映画館としていろんな人、コトをつなげるきっかけとなったようです。

こうした経緯を知るにつれ、一見無駄で都合の悪い諸条件は、工夫次第で逆に良い塩梅の建築空間を生み出す要因にもなり得るように思えます。古い海運業ビルを改装して出来た乙仲通りの魅力的な店舗群を調査した時にも私たちは同じような印象を受けたものです。



元町映画館エントランス前



1階平面図(出典:元町映画館ものがたり)



「元町映画館ものがたり」の装丁

## 土地と文化をつなぐ

元町映画館の歩みは、まちづくりに通じるものがあると思います。まずは、不動産所有者の考え方が決定的に重要ですが、何かを始めたいという人が誰も不動産を所有できるわけではありません。ここでは映画館をつくりたいと夢見ていた堀氏が廃墟化していた中古ビルの大家さんになられたことがすべての始まりであったのだと思います。まず、ベースとして小さな古いビルが残っている地域は個人や有志の団体でも建物のオーナーになれる可能性があり、まちを面白く変えていけるポテンシャルがあるといえるでしょう。それからここでは、建築は、「映画館」をつくるための手段であって目的ではなかったことが明らかです。建築家は、法律の困難を解決し、予算内で機能を満たしつつ、DIYの指南も行い、建物とスタッフた

ちをつなぐ役割を果たしました。映画興行のプロが誰もいないなか、それでも誰しものがなにごとのかのプロであり、法人の定款づくり、商業デザイン、電気工事、印刷、ボランティアの呼びかけ等、それぞれに関われること、出来ることをした人たちが、チームの一員として、その後の運営で力を発揮していったようです。

今、各地で行われているまちづくりにおいて、人々が集う場をつくるうえで、建築家が関わらなければいけない部分は少なくはありません。ただ、それは長いプロセスにおけるほんの一部でしかなく、建物が完成した後も、地域の人たちがいろんな特技を持ち寄り、その場所の魅力を高めていくことが何よりも重要です。そんな関わりしろと変わりしろを備えた、しなやかな建築をつくっていききたいものです。

元町映画館は、開館以来、体制を整備し、組織を強化しつつ、さまざまな企画を仕掛けて

いて、まさにまちづくりと呼べるような、社会や地域を変えていく活動を続けておられます。

昨年末に行われた濱口竜介監督との対談の中で林支配人は、「コロナ後に、もっと地域との関わりや、私たちの目指す公共性を獲得するためにどう開かれていくべきか、映画館を映画で埋め尽くさなくてもいいのではないか。」と、とても興味深い発言をされています。

コロナ禍での休業要請を乗り越えた元町映画館に、また映画を観に行きたいし、この土地で展開されていく、これからの新しいものがたりを注視していきたいと思えます。



村上 隆行 (むらかみ たかゆき)  
eu建築設計 代表 / 一級建築士  
/(一財)淡河宿本陣跡保存会代表  
理事 / 2015-2016年度乙仲通界隈  
デザインワークショップ実行委員長